

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：34414

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2016

課題番号：15K16652

研究課題名(和文) 6-8世紀の東アジア仏教美術史における釈迦信仰の諸相

研究課題名(英文) Aspects of the belief in Shakyamuni Buddha in 6th-8th century East Asian Buddhist Art

研究代表者

田中 健一 (TANAKA, Kenichi)

大阪大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：00611188

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、6-8世紀の東アジア仏教美術における釈迦信仰の様相について、辺土意識や仏身観といった問題に着目しながら、造形遺品とテキストを検討することで考察した。関連作例のデータ収集にあたっては、日本・中国・韓国での調査で写真資料を取得するよう努めた。本研究を通じて、瑞像、本生図、涅槃図などいくつかの成果が得られたが、一例として、釈迦に関連の深いインドの聖地である霊鷲山に関する論考がある。この論考では、古代日本において、霊鷲山が場の聖性とも関わって制作された具体的な様相を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on how the belief of Shakyamuni Buddha, especially on the thoughts of Buddha body, influenced on Buddhist Arts in East Asia, in 6th-8th century, examining artifacts and texts of the biographies of Buddha. Through this study, several papers based on the given theme were published. For example, as the result of fieldwork of sites in Japan and China, Ryojusen, which is the important sacred site in India, was often depicted in ancient Japan and made the sites where works were placed sacred.

研究分野：日本美術史

キーワード：仏教美術 釈迦 舍利 涅槃 本生 仏身観 霊鷲山

## 1. 研究開始当初の背景

近年、辺土意識と中華意識とのせめぎ合い、末法思想、あるいは王権思想、仏身観の展開、といった、東アジアの仏教国に顕著な心性が、東アジアの仏教美術史を理解する上での重要な鍵として注目を集めている。例えば、そうした見通しを主軸として、彫刻・絵画・工芸にわたる初唐期の仏教美術の特質と展開を鮮やかに描き出した肥田路美の研究などは最も重要な成果の一つであろう。

このような視座から、改めて重要な分析対象として浮上してくるのが、舍利とその荘嚴、瑞像、涅槃、本生図といった、上述の東アジア的な心性が端的に表れる釈迦信仰に関連する主題であると思われる。

また、インド・ガンダーラ地域の仏教美術に関する近年の研究は、舍利信仰や釈迦に関わる聖地に対する信仰が、仏教美術の誕生の初めからその本質であり続けた内実を明らかにしつつある。さらに、ヨーロッパにおけるキリスト教美術の研究においても、信仰に内在する視覚表象の問題と美術作品の関係を問い直す研究が活発になされている。これら国内外の研究動向は、仏教美術の東アジア的展開を深層から理解するうえで重要な視点を多く提供している。

本研究も、うへの研究動向上にある。研究代表者はこれまで、飛鳥-平安時代前期とその併行期の中国を主な研究領域とし、上述の釈迦信仰に関わる諸事象を実作品に即して考察してきた。主な成果としては、以下の諸点が挙げられる。

初唐期の舍利・涅槃に関わる最重要遺品の一つである中国山西省大雲寺涅槃變碑像の図像内容、造像記に分析を加え、本作の思想的背景として、如来常住思想や舍利信仰の存在を示した。さらに、同地における涅槃教学が図像内容に影響を与えたことなどを明らかにした。

飛鳥時代の著名な遺品である長谷寺銅板法華説相図の図様と銘文内容を分析し、仏法の相承と帝統の永続を重ね合わせる、初唐期に顕著になった舍利信仰と王権思想との相互関係、さらに靈鷲山など釈迦に関わる聖地を長谷寺周辺に見立てる意識が、図様成立の背景にあることを示した。

法隆寺五重本塑像群の主題構成に検討を加え、涅槃から弥勒下生という仏法の相承という観点から主題構成全体を解釈し、併せて則天期仏教の影響を指摘した。

鑑真による舎利の大量将来、阿育王塔信仰と本生図の受容状況を検討し、鑑真が請来した「阿育王塔様金銅塔」が仏教の内護者を自認したこの期の天皇に相応しい図像(捨身をともなう本生図)をもつこと、日本においてこの図像が定着した形跡がないこと、などを指摘した。

これらの成果の主要部分は、博士学位論文

としてとりまとめ、京都大学大学院文学研究科に提出した。本研究は、これまでの研究を補強・発展させる形で構想した。

なお、本研究の着想に至った経緯として、研究代表者が参加するいくつかの研究会活動がある。「唐代精神史研究会」、京都大学人文科学研究所「雲岡石窟の研究班」同研究所「古典解釈の東アジア的解釈」班など、美術史学のみならず考古学・歴史学・インドおよび中国の仏教学・哲学の第一人者が集う研究会に参加し、広く他領域からの意見を求めつつ研究を推進することで、当該地域の仏教美術の本質を、仏教文化の深層から理解するための客観的な見通しを得られると考えたことも、本研究を構想した一因である。

## 2. 研究の目的

本研究は、これまでの研究を補強・発展させることを目的として構想した。主に唐代と併行期の日本における涅槃美術の造形的・思想的特徴をさらに抽出すること、さらに、本生図の中国、日本への受容状況を解明する手がかりを得ることを主目標として遂行した。

上述の研究テーマ「東アジアの仏教美術における釈迦信仰」に関連する事象を文物・文献の両面から抽出し、体系化することを目指した。特に仏身観については、仏教学の成果を参照しつつ、特に『大般涅槃經』の読解に注力した。併せて彫刻・絵画・工芸遺品の中からとりわけ重要な事例を選定して、隣接諸領域の研究動向にも目を配りながら多角的に検討を加え、美術史上の位置づけを検討した。

具体的な研究の主目標として、以下点を設定した。本生図の中国、日本への受容状況の解明(法隆寺玉虫厨子など)、唐代と併行期の日本における涅槃美術の造形的・思想的特徴のさらなる抽出(京都報恩寺「釈迦如来および諸尊仏龕」など)。

## 3. 研究の方法

### (1) 重要作品の作品研究

本研究課題にとって重要と思われる事例を選定し、様式・図像・制作背景・制作技法・安置空間・機能などの観点から多角的に検討を加えた。その遂行にあたっては、図像・主題を同じくする作例を広く蒐集した。

### (2) 関連資料の収集整理

本研究課題に関係する既存の写真資料・調査記録・関連文献などを蒐集し、整理・体系化を行う。資料蒐集については、勤務先である大阪大谷大学において、必要な図書資料を購入しつつ行い、さらに研究代表者が非常勤職員として勤務する京都大学文学部、京都国立博物館の所蔵資料を利用した。資料の体形化の過程で特に重要な国内所在作例については、実査を行った。

### (3) 海外調査の実施

本研究を遂行する資料蒐集を行うために、海外調査（主に中国・韓国の遺跡・博物館）を実施した。

#### （４）中間報告

多分野の研究者の集う研究会において、研究の中間報告を行い、ひろく意見を求めた。

#### ４．研究成果

##### （１）関連資料の収集整理

写真資料を効率的に収集するため、高倍率のズームレンズとマクロレンズを購入し、国内外での現地調査に赴き、写真撮影を行った。現地調査にあたっては、本科研外のプロジェクトでの出張の機会も利用した。これらの資料収集に加え、スキャナーを用いて既刊書の画像もできる限りデジタルデータ化し、当該研究テーマに関連する多くの資料を蓄積することができた。

海外調査について、平成 27 年度には中国四川省・陝西省・甘肅省、韓国ソウルにおいて、また平成 28 年度には北京市・陝西省・甘肅省・福建省・上海市において南北朝～宋代を中心に画像データを収集し、重要と思われる作例の調書を作成した。

主な成果として、広元皇澤寺、広元千仏崖、梓潼臥龍山石窟、碧水寺石窟、夾江千仏崖などで、唐代の釈迦瑞像・阿弥陀瑞像の作例を多く収集することができた。この調査の成果は、後掲〔雑誌論文〕に反映した。また重慶市宝頂山石窟、四川博物院、安岳石窟（臥仏院）、西安碑林博物院、麦積山石窟、南北石窟寺、王母宮石窟、大雲寺、平涼博物館、固原博物館、須弥山石窟、炳靈寺石窟、韓国・国立中央博物館において、仏伝図・本生図関連の図像を収集した。殊に涅槃図関連の図像を多く収集し、その成果は〔学会発表〕に盛り込んだ。また本生図に関わる成果は後掲〔学会発表〕に反映した。

国内調査としては、天野山金剛寺（河内長野市）所在のすべての彫刻作例について、写真資料を取得し、熟覧のうえ調書を作成した。その成果の一部は後掲〔図書〕に公表した。また当該研究の重要作例である報恩寺（京都）仏龕についても、熟覧のうえ調書を作成し、細部写真を取得した。これに関わる成果の一部は後掲〔学会発表〕に反映している。

##### （２）資料収集を踏まえたテーマ研究

法隆寺伝橋夫人念持仏について、法隆寺金堂釈迦や勸修寺旧蔵釈迦如來說法図などの釈迦図像との混淆状態の意義を再検証した。四川調査における作例収集を踏まえ、同像と阿弥陀五十菩薩像といった瑞像説話との接点を求める論文を発表した（後掲〔雑誌論文〕）。

7 世紀における舎利信仰の重要遺品である「長谷寺銅板法華説相図」について、靈鷲山信仰史上の位置を考察する論文を発表した

（後掲〔雑誌論文〕）。

法隆寺玉虫厨子を中心に、東アジアの本生図の特性に関する検討を進めた。国内での二つの学会で中間発表を行い、その後国際美術史学会後掲〔学会発表〕で口頭発表した。この発表は論文化し、国際美術史学会に提出した。さらに、この成果を応用した内容を四天王寺仏教文化講演会（平成 28 年 7 月）、大阪大谷大学公開講座（平成 28 年 10 月）、大阪藝術学舎（平成 28 年 12 月）といった講演会で公表した。

東アジアの涅槃図に関する重要な事例である再生説法図の成立の問題を検討し、インド・中国の造形作品の展開と、大乘涅槃経の成立史および中国での解釈史とに関連付けながら説明付ける具体的な見通しを得ることができた。さらにこれを応用して、法隆寺五重塔塔本塑像群の尊格比定に関する新たな提言を行うことができた。涅槃の造形に関するこれらの成果は、後掲〔学会発表〕で公表し、さまざまな教示を得た。

#### ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

田中健一「乾漆像と古代の道」、『季刊考古学』26 号、6 頁（予定）、査読無、2017 年 掲載確定

田中健一「日本古代仏教美術における靈鷲山表象——長谷寺銅板法華説相図を中心に」、『平成 25 年～平成 27 年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書（研究課題番号 25284030）東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態（研究代表者：京都大学・人文科学研究所・准教授・稲本泰生）』、59-81 頁、査読無、2016 年

田中健一「橋夫人念持仏にみる日本古代の他界観」、『大阪大谷大学歴史文化学科調査研究報告書』第 2 冊、41-66 頁、査読無、2016 年

〔学会発表〕（計 4 件）

田中健一「七-八世紀東アジアの涅槃表象と仏身観：蒲州大雲寺涅槃変碑像と法隆寺五重塔塔本塑像群を中心に」、『東アジア美術における仏伝の表象』第一回ワークショップ、京都大学人文科学研究所大会議室（京都市左京区）、2016 年 12 月 23 日

TANAKA Kenichi, Jianzhen's Transmission of Art and Adoption in Japan, The 34th World Congress of Art History (国際学会), Central Academy of Fine Arts, Beijing, China, Sep.18.2016

田中健一「東アジアにおける本生図」、中国美術研究会、京都大学人文科学研究所(京都市左京区) 2015年11月22日

田中健一「東アジアの本生図」、京都大学人文科学研究所人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点「古典解釈の東アジア的展開 宗教文献を中心課題として」、京都大学人文科学研究所(京都市左京区) 2015年7月18日(土)

〔図書〕(計2件)

[編集委員長]竹田晃、[編集幹事]大木康、[編集委員]板倉聖哲、市川桃子、尾崎文昭、木村英樹、西本晃二、林文孝、[執筆]田中健二(ほか省略、総138名)『中国文化事典』、丸善出版、総808頁(うち4頁2項目を執筆)、2017年。執筆項目:「唐都長安の繁栄と美」「石窟案内(敦煌莫高窟・龍門・雲崗石窟)」

[監修]伊東史朗、[責任編集]赤川一博、吉原忠雄、神田雅章、大河内智之、[執筆者]岩井共二、岩田茂樹、佐藤大、瀧川和也、田中健一、堀内光信、山口隆介、山下立『神像彫刻重要資料集成第三巻[関西編二]』国書刊行会、総500頁(うち12頁を執筆) pp.349,352-354,378-385、2016年

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

田中 健一(TANAKA Kenichi)  
大阪大谷大学・文学部・准教授  
研究者番号:00611188